

第 70 回公開シンポジウム

絵本で築く親子の絆

◆ プレゼンター

森 ゆり子

NPO 法人「絵本で子育て」センター 理事長

◆ パネリスト

稲垣 由子

甲南女子大学総合子ども学科教授 / 発達行動小児科学

◆ 司

会

一色 伸夫

甲南女子大学総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

一色: それでは、第 70 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「絵本で築く親子の絆」をテーマで考えていきたいと思います。「うざい」「死ね」「消えろ」などの粗雑な言葉、短絡的な思考しかできない子どもたち。物質的な豊かさや便利さによって、昔は当たり前のように行われていた親子の心の交流が、失われつつあります。子どもたちの心を育てるのは、決して「モノ」ではありません。絵本を読んであげることで親子が心を通わせてくるということです。本日、プレゼンターとして基調講演をお願いしている先生は、森ゆり子先生。NPO 法人「絵本で子育て」センターの理事長をされています。大学をご卒業後、ほるぷという会社に入社され、そこで、ほるぷフォーラムを設立されて、2004 年に NPO 法人「絵本で子育て」センターを設立して、理事長に就任されました。ここでどのような活動をされているかという点、「絵本講師・養成講座」の開講など、関西地区における絵本と子育てに関する講演活動を積極的に展開されています。従いまして、総合子ども学科の学生の皆さんは、これから、幼稚園、保育所などで絵本を教材にして、子どもたちに読み聞かせる機会が多いと思います。今日の森先生のお話はとても参考になると思いますので、しっかり聞いてください。そして、パネリストとしては、本学の総合子ども学科の稲垣先生にお願いいたします。森先生のお話に対して、また別の視点からお話をいただくことになっております。では、森先生よろしく願いいたします。

森: 皆さん、こんにちは。森ゆり子と申します。よろしく願いいたします。まず、最初に絵本の読み聞かせから入りたいと思います。子どもたちが、どんなふうに絵本を読んでもらっているのかを皆さんにも感じて欲しいと思います。この本をご存じの方いますか。これは『ちびゴリラのちびちび』という絵本です。では、この本を読んでみますので、皆さん、子どもになったつもりで絵を楽しんでください。

朗読：『ちびゴリラのちびちび』

ルース・ボーンスタイン／さく、いわた みみ／やく、© ほるぷ出版

せかいじゅうのゴリラに

そして ゴリラのすきなみなさんに

ちびゴリラのちびちび

ちいさな かわいいゴリラが いました。

みんな ちびちびが だいすきでした。

おかあさんも

おとうさんも

おばあさんも おじいさんも ちいさいゴリラが だいすきでした。

ちびちびが うまれたそのひから みんなは

このちびゴリラが だいすきでした。

ひらひら とんでる ピンクのちょうも

みどりのおおむも

あかいさるも

ちいさいゴリラが だいすきでした。

あのでっかい へびだって「ちびちびは かわいいな」

と おもっていました。

さんぽがすきな のっぽのキリンは いつも そばにいて

ちびちびを たすけました。

こどものぞうも おとなのぞうも

ちびちびに あいに やってきました。

ライオンのおじさんは ちびちびをよろこばせようと

おおきなひめいを あげてやりました。

かばのおばあさんは ちびちびが いきたがれば どこへでも

いっしょに いってやりました。なぜって ちびちびが

だいすきでしたから・・・

そうなんです。もりのどうぶつたちは みんな

この ちびゴリラが だいすきでした。

そんなあるひ なにかが おこりましたー

ちびちびが おおきくなりはじめたのです。

どんどん

どんどん

どんどん おおきくなって とうとう・・・

こんなに おおきく

なりました！
もりのみんなが やってきました。
そして みんなで うたいました。
「おたんじょうび おめでとう
ちびちびくん！」
みんなは いまでも ちびちびが だいすきです。
おしまい。『ちびゴリラのちびちび』でした。

どうでしたでしょうか。こんな短い絵本の中に「だいすき だいすき」というフレーズがたくさん入っています。読んでもらっている子どもたちは、自分のことを「だいすきだよ」と言われているのと同じなのです。だからこそ、子どもたちに圧倒的な人気を誇っています。そして世界各国で翻訳され、出版され、子どもたちの手元に届いている絵本の一冊です。「本を読んだ後で、質問をしたり、感想を聞いたりしないでください」と、いつもお願いしています。読んだ後にいろいろ質問していると、次は何を質問されるのだろうか、何を聞かれるのだろうかと構えてしまいます。心を解放して楽しむことが出来なくなります。小さい子どもたちには、「おしまい」で終わっていいと思います。段々と大きくなってきて、子どもたちからいろいろと言ってきた時は、しっかりと答えてあげたいと思いますが、小さい時は、「あれは何かな」「あの動物の名前は何かだったかな」という質問はしないでください。感想を聞いたりしないでください。絵本を読んだ後で質問したり感想を聞いたりすることほど、読んだ事を台無しにする行為はありません。ただただ楽しい時間を過ごして欲しいと思います。

でも今日は、皆さん、大人ですから、質問を一つだけさせていただきます。ちびゴリラは何歳のお誕生日を迎えたのでしょうか。いかがですか。ヒントになるようなところがありましたね。《おたんじょうび おめでとう ちびちびくん！》ここに、ろうそくが5本あります。5歳の誕生日を迎えたのだと子どもは気が付きます。こんなに大きな画面に映していても、大人になったら、ついつい文字のほうを追っていきますが、文字に興味のない子どもは絵しか見ないのです。絵をしっかりと見ます。絵本には、絵が表わす言葉、ろうそく、ゴリラ、小さいゴリラ、大人のゴリラ、小さいゾウ、大人のゾウなどたくさんあります。文章の言葉は、《おたんじょうび おめでとう ちびちびくん！》だけなのですが、絵の言葉はもっともっと豊かです。そして、文字を読むことができない子どもは、絵をしっかりと見ながら、文字の言葉を大好きな読み手の声でしっかりと聴くことができます。そして、文字の言葉と絵の言葉を調和させて、話を膨らませていきます。だから、子どもは大人の何倍も絵本を楽しむことが出来るのです。小さい頃は、まだ物語を理解することができませんので、「だいすきだよ」というフレーズが耳に心地よくて、子どもたちは、とてもこの絵本が好きです。自分が「だいすきだよ」と言われているような気持ちになるからです。そして、もう少し大きくなって、物語を楽しむことができるようになってきたら、「5歳だったね」とわかってきます。ある子どもが4歳の誕生日の時にバースディケーキを用意してもらいました。4本ろうそくが立っているのを見て、この本を持ってきて、「お母さん、ちびゴリラは、5歳の誕生日だったんだね」と、実体験を通して気付いたそうです。絵本体験をしたことを、実体験することで、その体験は

より確かなものとして、心のなかに残っていきます。絵本によって、いろいろなことを理解していく力をつけてきます。ですから、いい絵本は、処分しないでずっと置いておいて欲しいと思います。子どもたちは、年齢が上がる毎にいろいろな読み取り方、楽しみ方をしていきます。《もりのみんなが やってきました。そして みんなで うたいました。》というところがありました。絵をしっかりと見る、絵をしっかりと読む子どもたちは、「みんなじゃない。蝶々がいないよ」と言うのです。蝶々は、裏表紙に一匹いるのです。だから絵本は表紙から裏表紙まで、しっかりとみせてあげたいのです。見返しなどは、特に意味がないようですが、絵本画家が、作家が、編集者がどういう色にしたらいいのか、どういう柄にしたらいいのかを推敲して作り上げています。絵本全部を見せて、絵本を丸ごと楽しませてあげて欲しいと思います。

それでは、子どもたちは、どんなふうにも情緒、心を育てていくかということを、この『いない いない ばあ』という絵本で説明します。この絵本は、1967年に出版されました。この絵本が出版された時は、「いない いない ばあ」という遊びは、やるもので、本で読むものではないだろうと言われました。でも時代が変わり、核家族化が進み、そして、「いない いない ばあ」ということが恥ずかしくてできないという親が出てきた時代になりました。そういう中で絵本『いない いない ばあ』は、大きく化けました。とてつもなく多くの親子に支持されるようになりました。今、日本で一番売れている絵本は、この『いない いない ばあ』です。この遊びですが、世界各国で同じような遊びがあります。京都の丹波地方では、「おらんと おらんと ばあ」と言ったそうです。また、島根県では、「めん めん ばあ」、関東地方では、「いない いない ばあ」など全国各地で、いろいろな語り口があったそうです。この本が1967年に出版されて、「いない いない ばあ」一つになりました。他の言い方は隠れてしまいました。子どもたちは、「いない いない ばあ」をととても喜びます。では、子どもたちにとって、この遊びは、どういう意味があるのでしょうか。文学者や精神科医の方などがこの遊びを考察されています。大好きな人、いつもあやしてくれる人が「いない いない」といって顔を隠す、そして、「ばあ」と言ってまた会える、闇と光です。別離と再会です。いなくなって、もう会えないのではないかという不安な気持ち、そして、また会えた時の再会を喜ぶ気持ち、不安と安心、恐れと平穏という感情を行ったり来たりしながら情緒を安定したものに育てていくと言われています。そして、「いない いない ばあ」遊びの最後は絶対に「ばあ」で終わらなければいけません。「いない いない」で終わっては不安を残すことになります。「ばあ」を言う時に、怒った顔をする人はいません。にっこりとした顔でします。子どもは安心感に包まれます。そして「いない いない ばあ」遊びをしてもらっている子どもは何回しても、相手はどこかに行ってしまう、ずっとすぐそばで自分を見守ってくれる、何回別れてもまた会える、再会を喜び、安心感、幸せな気持ち、平穏な気持ちになります。そして、そうやってずっと自分を見守ってくれている相手は自分から離れていかない、見捨てたりしない存在なのだと信頼するわけです。また、自分自身に対しては、自分はたいせつな存在であり、大好きな人に見守ってもらえる確かな存在なのだとすることで、基本的信頼、自己肯定感、自尊感情などを育てていくわけです。自尊感情、自己信頼感、自己肯定感というものは、自分一人の力では育てていくことはできません。周りの大人がどのように関わってくれるのか、周りの人たちが醸し出す雰囲気の中でそういったものを

育てていきます。たった「いない いない ばあ」というこれだけのことで、そのように、心の育ちに大きな影響を与えているのです。だから、ずっと昔から伝えられてきた遊びは、それなりの意味があるのだと思ってほしいのです。「いない いない ばあ」がとても恥ずかしくてできないと言う人がいます。でも、この本を読むことで安心して、恥ずかしくなくなって、この遊びをするようになったという方がたくさんおられます。絵本と遊びと子どものこころの育ちは、密接な関わりを持っています。児童文学は行きて戻りし物語といわれています。お話のストーリーも、どこかに行って帰ってくる、おつかいに行つて帰ってくる、冒険をして帰ってくる、そのストーリーの展開部分でどんなに不安な部分があっても、恐れがあったとしても、結末が安定していることが、子どもの心を育てる要因ともなるわけです。物語と子どもの心の成長とは密接な関係を持っています。ですから、幼い子どもたちには、うれしい、楽しいなどのハッピーエンドのお話をとんとんしてあげればいいのかと思います。

さて、現代の子どもたちはどういう状況の中にいるかということをお話したいと思います。世界的に見ても、先進国の中で、日本の子どもたちは自尊感情が育っていないと言われていています。データを紹介します。2006年に九州の宗像市で自分を駄目な人間であると思ったことがあるかどうかという質問に対して、小学校4年生と6年生を対象にアンケートを取りました。67%の子どもが自分が駄目な人間だと思ったことがあると答えています。2007年子ども白書から、生きていても仕方がないと思ったことがあるかどうかという問いに、小学校4年、5年、6年生を対象に調査しました。35.3%の子どもが生きていても仕方がない、死んだ方がましだと思ったことがあると答えています。それから、ユニセフ児童基金、国連が調査したもので15歳を対象に、孤独を感じているか、平均が7.4%のところ、日本の子どもたちは、29.8%、なんと約30%の子どもたちが孤独を感じると答えているのです。このような豊かな日本の中で自分は生きていても仕方がないとか、孤独を感じているというのは、一体どういうことでしょう。親は自分の子どものために、よかれと思い、経済が許す限り、何でもしてあげたい、こうあってほしいといろいろな期待をかけていきます。そして、幼い子どもは、親の期待に添うように頑張っていきます。ただただ、大好きな親の喜ぶ顔を見たいということで、その理想に近づくように頑張っていくわけです。でも、子どもからすると、今のあなたでは、お母さん、お父さんは、不満足なのよ、こういう子どもがお母さんにとって好ましい子どもなのよと言われているのと同じです。今の自分では駄目なのだということ言われているのと同じなのです。子どもは、大好きな人を恨んだり、憎んだりできません。一生懸命、そこに辿りつこうとするのですが、そこに行けない時期が必ず来ます。みんなが、野球のイチロー選手になれるわけではありません。みんながスケートの浅田真央選手になれるわけではありません。そこまでいけない時にそのギャップに悩み苦しんで、親の理想にそえない自分は、愛される資格がないのだと思いはじめ、いろいろなストレスを溜め込んでいきます。そして、ある時期それが大爆発をしてしまうというような事件が起きています。親がどんなに愛している、たいせつだよと思っていても、その気持ち子どもに伝わらなければ、子どもの方からすると、愛されているとは思えないのです。では、どうしたら、愛しているよ、大好きだよと伝えることができるのでしょうか。その大きなヒントに、絵本の読み聞かせがあるのではないかと、私たちは思っています。先程紹介しました『ちびゴリラのちびちび』もそうでしたが、愛を伝える絵本はたくさんあります。次は『いいこってどんなこ?』を紹介します。感

情的に子どもを叱りつけた日は、ごめんねという気持ちをこめて、必ずこの絵本を読むようにしていますとおっしゃるお母さんがいました。

朗読：『いいこってどんなこ?』

ジーン・モデシット／文、ロビン・スポート／絵、もき かずこ／訳、© 富山房

いいこってどんなこ?

わたしたち みんなに

「ねえ、おかあさん、いいこって どんなこ?」

うさぎの バニーぼうやが たずねました。

「ぜったい なかないのが いいこなの?

ぼく、なかないように したほうが いい?」

おかあさんは こたえました。

「ないたって いいのよ。でもね、バニーが ないしていると、

なんだか おかあさんまで かなしくなるわ」

(以下略)

おしまい。『いいこってどんなこ?』でした。

この絵本を書かれたジーン・モデシットさんとロビン・スポートさんは、ご夫婦です。そして、もきかずこさんが翻訳されました。読んでもらっている子どもたちは、読んでくれている人が自分に「そのままでいいんだよ。泣き虫でもいいんだよ。そのままのあなたがたいせつなのよ」と言ってくれているのと同じなことなのです。自分の言葉で言えなくても、絵本を読むことで、思いを伝えることができます。もちろん、「絵本がなくても、私は十分子どもを愛しているよということを伝えることができます」とおっしゃる方は、とても素敵だと思いますが、今、子どもにどう接していいかわからない、どんな声かけをしていいかわからない、たいせつだけれども、たいせつだよと言えないという方がどんどん増えてきています。そういう時に、絵本を手助けに、子育てして欲しい、気持ちを伝えて欲しいと思います。それでは、そういう愛している、たいせつだよと伝えたい気持ち、或いは、いろいろなことを絵本が伝えてくれるわけですが、伝える、読んであげる本は、やはり、大人の目でしっかりと吟味した、良質の絵本を選んでいただきたいと思います。

では、良質な絵本、おすすめできる絵本はどういう絵本かということをお話します。『ももたろう』という本はこれまで 200 冊以上出版されているといわれていますが、今入手できるのは、絶版が多いので、20 冊ぐらいでしょうか。今日は、少し持ってきました。このように、100 円ショップで売られている絵本もあります。たくさん種類がありますが、人にすすめられる絵本は数冊しかないといわれています。その中の一冊がこの『ももたろう』です。一般的にいわれている、いい絵本の選び方をお話します。絵本の後ろに奥付というところがあります。初めて出版されたの(初版)がいつかと書いてあります。この本は、1965 年に出版されています。出版されて 10 年 20 年読み継がれた本がいい本だと思ってくださ

い。では、新しい本にいい本はないのかとの質問を受けることが多くあります。毎年、絵本、児童書は、2000冊ぐらい出版されています。その中で素敵な絵本も、もちろんたくさんあります。でも、なかなかどの絵本がいい絵本かというのは、わかりにくく、絵本選びは大変です。そういう時には、初版から何年経っているのかを目安にさせていただいたらいいかと思います。そして、物語絵本の時は、このように絵だけ追って行っても絵がストーリーを物語っているような絵本がいい絵本といわれています。次に、このように見返しがあって、扉があって、奥見返しがある絵本、舞台で言えば、幕が上がる場所、下りるところ、子どもたちは、現実の世界から集中力を高めて、絵本の中に入っていくことができます。そして、きれいな日本語、正しい日本語で書かれているかどうかが大きなポイントになっています。

今、家庭に言葉がなくなっています。生まれてすぐ、テレビやビデオの電子音の中で育っている子どもたちがたくさんいます。生の言葉、生の声の語りかけがない家庭で育った子どもが一人前の社会人として人間として育っていくことができるのだろうかとたくさんの方が危惧しておられます。その中の一人が、『ももたろう』を再話された松居直さんです。福音館書店の相談役をされています。この方が、家庭に言葉がないとたいへんなことになるとおっしゃっています。読み聞かせをするということは、家庭に言葉を取り戻すことにもなるとおっしゃっています。そして、この方は、3人子どもさんがいらっしゃるのですが、子育てに10年間読み聞かせをされたそうです。読み聞かせをする中で、人として伝えなければならないことは、すべて伝えてきました。私より優れた人の優れた言葉で、しかも、絵まで添えて、私はただそれを読むだけでよかったのです。良質の絵本を読むことで、人として伝えなければならないたいせつなことをすべて伝えてきましたとおっしゃっています。それだけの力が良質の絵本にはあるということをおっしゃっています。そして、ご長男は、読み聞かせをしてもらってきたことをこのように語っておられます。「幼いころに心をこめて語ってもらったお話は、その後も心から消え去ることはありません。それどころか人生の最も重要なときに、心の底でよみがえり、さまざまな考え方を指し示してくれるのです。いやそればかりか語ってくれた人の温かい心が思いだされ、少年の心を勇気づけてくれたりしたのです。お話を語るということは、人生の航海術を教え、灯台の灯を灯してあげることなのです」とおっしゃっています。一人の人間が人として伝えられること、経験した量も限られています。優れた人の優れた絵本を読むことで、自分一人で伝えきれないことを伝えていってあげて欲しいと思います。

次に、あまり、おすすめできない絵本と言われる本を紹介したいと思います。この『ももたろう』の本ですが、桃太郎といえば、桃から生まれるとか、鬼ヶ島に鬼退治に行くとか、そういう内容が入っていたら全部同じ桃太郎だと考えている方が多いと思います。でも、子どもたちは、包丁で切ったのに、どうして桃太郎が死んでしまわないのかと言っています。ある人のお孫さんは、桃を切るページに来ると必ず「桃太郎さん、いたいね、いたいね」と言うそうです。そういうところ子どもはしっかりと感じとっていきます。この本は、桃を割ろうとすると、桃がじゃくつと割れて、中からかわいい男の子が「ほおげあ ほおげあ」と生まれましたとあります。自分の力で、力強く誕生したと書いています。それから、私が一番気になる場所ですが、鬼が悪いと決めつけていないのです。カラスがやってきて、こんな悪いことをしたと理由をしっかりと書いています。だから鬼退治に行くと書いています。ここはとても大事な場所です。こちらの本は、見返しもありませんし、扉もありません。桃を切って中から元気な赤ちゃん

が飛び出したところでは、ちっとも強そうじゃないと、子どもたちは言います。そしてページを開けると、鬼ヶ島に鬼退治に行く、ここには理由は何も書かれていません。こういうふうに省略ばかりの本を読んでも、子どもの心を育むのはとても難しいと思います。

では次に、『さっちゃんのまほうのて』を読みます。皆さん、この本は目を閉じて聞いてください。心の中でイメージしていただきたいと思います。全部を読みましたら10分以上かかりますので、大変失礼なのですが、少し省略させていただきます。

朗読：『さっちゃんのまほうのて』

たばたせいいち、先天性四肢障害児父母の会、のべあきこ、しぎわさよこ / 共同制作、© 偕成社

さっちゃん は きょう、

とっても おかあさんに なりたかったのです。

おかあさんに なって、みんなに おやつを あげたり、

あかちゃんに ミルクを のませたり したかったのです。

ほんとは、ようちえんの ままごとあそびの

おかあさんですけれどね。

(以下略)

おしまい。『さっちゃんのまほうのて』でした。

この絵本を紹介した時、「さっちゃんは、幼稚園児なのに馬鹿じゃないの。小学生になったら本当に手が生えてくると思っているのかしら」とおっしゃったお母さんがいました。

次は、みどりちゃんという3歳の女の子のお話です。みどりちゃんがお母さんにこの本を読んでもらったそうです。みどりちゃんは、両手をぐっと握りしめて、目に涙をいっぱい溜めて聞いていたそうです。この本は、一般的に、小学校の低学年ですすめられる絵本です。みどりちゃんが「読んで」と絵本を持ってきた時、3歳の子にはちょっと早いかたとお母さんは思われたそうですが、読んであげたところ、最後まで聞いたのでびっくりしたそうです。お父さんが夕方お仕事から帰ってきました。みどりちゃんは、玄関まで走って行って、「お父さん、さっちゃんだってお母さんになれるんだよ。指がなくてもお母さんになれるんだよ」と訴えるんだそうです。昼間読んでもらった本のことが、ずっと心の中に焼きついていました。感動したことは、心から消えていきません。ずっといつまでも心の中に残っていきます。そして、お父さんはすぐに答えてあげることができました。「そうだよ」と、みどりちゃんが言ったことにすぐに答えてあげれる、すぐに通じる親子の回路も持っているということは、とても大切なことです。お父さんが「そうだよ。さっちゃんだってお母さんになれるんだよ」と答えると、安心してまた自分の遊びに戻っていききました。

今、子どもたちは、優しくないとか、想像力がないとか、人の気持ちがわからないとかよく言われていますが、たった3歳のみどりちゃんですえ、さっちゃんの悔しい気持ち、悲しい気持ち、切ない気持ちを理解することができたのです。さっちゃんの心に寄り添うことができたわけです。絵本を読んであ

げるとするのは、理屈でもないし、お説教でもありません。「ほらほら、こうでしょう。だからこういうことを言うてはいけないのよ。だから、こうしなければいけないのよ」と、理屈やお説教で言う必要はありません。ただ淡々と読んであげればいいのです。絵本がいろいろなことを伝えてくれるのです。可哀そうだったね、悲しかったね、悔しいだろうねえ、そういう気持ちを親子で共有することがたいせつなことなのです。一冊の絵本を仲立ちにして、親子が感動を共有する、悲しみも喜びも…そういう時間をどれだけ重ねていったかというのが一番大事なことだと思います。絵本を読んでいる時の状況を皆さん想像してみてください。お膝の上にのせたり、肩と肩を寄せ合ったり、同じ一冊の本を同じ方向で見るわけです。そして、大好きな人の声を聞きながら、温かさを感じながら、そして、今ごろでしたら、汗の匂いかもわからない。風呂上がりだったら、石鹸の匂いかもわからない。子どもにとっては、五感を使って、丸ごと受け入れられているということを実感しているのです。絵本を読んでもらっている時間というのは、そういう時間に他ならないわけです。子育てがとても難しい時代になった時に、親子でそういう時間を共有するのは、とてもたいせつなことだと思います。どうしていいかわからないという時は、いい絵本を手助けに子育てをしていって欲しいと思います。

絵本を読む、読書するという行為は、他人の心に寄り添う心を育てる行為にほかにありません。物事をどうとらえていけばよいのか、自分はどう生きていけばよいのか、人が人であろうとする行為にほかにありません。心は育てなければ育ちません。生まれた子どもを一部屋に隔離して食事だけを与えているようでは、心は決して育っていきません。では、心を育てるということはどういうことか。耳障りもいいですし、抽象的です。いったいどうすればいいのでしょうか。心を育てるには、身体の基本体力を作るように、心の基本体力も作って欲しいのです。心の基本体力を作るには、毎日マラソンをするように、毎日縄跳びをするように、心を毎日揺さぶって欲しいのです。心を揺さぶるということは、ワクワク、ドキドキ、ハラハラ、ホッとしたり、ハッとしたり、嬉しかったり、悲しかったり、いろいろな感情体験をするということです。心を揺さぶることで、心を育てていくことができると思います。

今、子どもたちの遊びの中で、3つの間がなくなってきたと言われています。まず、空間、遊び場のことです。それから仲間、時間、がなくなってきました。昔は、異年齢の子どもたちが集団で遊んでいました。大きいお兄ちゃんが小さい子どもを連れて、一緒に群れて遊んで、泣かしたり、助けてあげたり、助けてもらったりするなかで、いろいろな感情体験をすることができたのです。今はそのような機会が殆ど無くなってきました。昔は、「本は読まないより、読んだ方がいいよ」と言われるくらいでした。でも、現在において、絵本が伝えてくれることの大きさの比重は、どんどん大きくなってきています。教育関係者だけではなくて、いろいろな分野の方たちが、絵本の読み聞かせの素敵さ、たいせつさを訴えています。子どもたちの育ちを警告されている方は、たくさんいます。日本のように、たくさんの素敵な絵本がすぐ手に入る国はなかなかありません。是非、このような良質な絵本を手助けにして、そして、大人の目でしっかりと吟味した絵本を読むことで、子どもたちのよき導き手になっていただきたいと思ってやみません。皆さんのために、今日は『あなたがだいすき』たいせつなあなたへというこの本を読ませていただき、終わりにさせていただきます。こんな小さい本ですので、絵は見えないと思います。言葉だけを聞いていただければ嬉しいです。

朗読：『あなたがだいすき』

鈴木まもる／作・絵、© ポプラ社

あなたが　だいすき

わたしは　あなたが

だいすきです

せかいで　いちばん

あなたが　だいじ

あさも　ひるも　よるも

あなたと　いっしょ

いつでも　あなたを

まもってあげる

(以下略)

おしまい。『あなたがだいすき』でした。

ご清聴どうもありがとうございました。今日の絵本講座はこれで終わりにさせていただきます。

一色：森先生どうもありがとうございました。松居直さんの良質の絵本とは、人として伝えなければならないことをすべて伝えてくれているということで、具体的には、森先生から絵本の読み聞かせで、『ちびゴリラのちびちび』『いない　いない　ばあ』『いいこってどんなこ?』『ももたろう』『さっちゃんのみほうのて』『あなたがだいすき』など、心に染み渡る絵本を読んでもいただきました。このような絵本について、パネリストの稲垣先生からコメントをいただきたいと思います。

稲垣：いいお話でしたね。とても心が豊かになったような気がします。私の子育てで、自分の子どもに絵本を読んだことがあるかと思うと、実は、私の子どもは本が大好きで、保育所に通っていたから、保育所から帰ったら、私が読むよりも、自分で勝手に読んでいました。私が読むと下手だからと言って、自分で節をつけて、文字は読んでいないですが、覚えて読んでいたことを思い出しました。今ご紹介していただいた絵本を聞かせていただき、本当に心が豊かになりました。

何年か前に大学院の学生さんで絵本を介した母子相互関係の考察という修士論文を書かれた桜井さんという方がおられて、その桜井さんの修士論文を久しぶりに読み返しました。非常にいい論文だったと思いますが、その中で、前言語段階の親子関係のところを考察しています。その中の一つとして、皆さんもご存じだと思いますが、ブックスタートという事業があります。これは1992年にイギリスから始まった0歳児の子どもに絵本をという働きかけです。日本では、2001年に始まりまして、現在全国で1750の市町村がありますが、その1750の内732の市町村で行われています。0歳の子どもに絵本を提供することにしています。兵庫県では、13市町村で実施しておりまして、芦屋市は実施しています。残念ながら、神戸市はまだ実施していません。桜井さんが平成14年に論文を書いた時は、ブックスタート

はまだ50箇所のところではしか実施されていないと論文では書かれていますので、それからずいぶん全国に広がってきた政策だと思います。これは、正に先生がおっしゃったように、親子で本を介して心と心の響き合いを育てよう、そして、子どもが豊かな親子関係を感じていこうという政策になっています。その辺りをずいぶんと感じさせていただきました。

皆さん方も最後の『あなたがだいすき』を聞かせていただいて、やはり、子どもに絵本を読み聞かせることが、保育士としてとても重要な仕事で、子どもにとって大事な仕事を保育所でも幼稚園でもやっていくのだという実感をしたことと思います。私自身は、虐待事例の臨床をしておりますが、先ほど、森先生とお話していたのですが、虐待関係というのは、親子の関係性の非常に破綻した最悪の状態ですが、この親子たちが絵本を読みながら、絵本を介してコミュニケーションができていたら、どんなによかったかと感じました。絵本というのは、子どもと親と或いは人と人、今であれば、森先生と私たち集団が絵本というものを介して、心が響き合った、この空間が響き合った環境であって、人と人をつなぐものとして、とても重要な意味を持っていることを実感させていただきました。どうもありがとうございました。

一色：稲垣先生、どうもありがとうございました。ブックスタートということで神戸市が実施していないということでしたが、全国では、1750の市町村の中で約半分732が実施しているということで、もっと増えていってもいいと思うのですが、これは、保健所とかで赤ちゃんの頃からスタートしていくわけです。これも先ほどの、松居直さんも関係されています。ブックスタート、絆みたいなものにつながることによって、虐待のケースも少なくなるのではないかというお話を伺いました。では、ここからは、森先生と稲垣先生が、お話していただいたテーマを更に深めていきたいと思います。

森先生のお話の中で非常に印象的だったのが、心を育てる、心の基礎体力を作る。そのためには、毎日心を揺さぶらせなければいけない。いろいろな感情体験をすることが必要だというお話でしたが、この辺りは、いろいろな体験を親、保育士がさせるというような格好でしょうか。それとも子どもが関心あるそういったことに対していろいろな方面から揺さぶるようなことを親なり、保育士、教員がしなければならぬということでしょうか。

森：どちらがということはないと思います。少し話が外れるかもしれませんが、良質の絵本を選んで読んであげてくださいと皆さんにお話しました。「絵本講座」では、いつも絵本を紹介しながら、良質な絵本の選び方などをお話します。そうしましたら、お母さま方は、一生懸命メモを取って帰られます。今日、紹介した絵本をメモされ、帰りに書店でその絵本を購入されるようです。いい本だと思って読んであげたのに、子どもはそんなに反応しませんでしたというお便りを時々いただくことがあります。いくらいい絵本でも、その時の子どもの興味や関心にぴたり合っていなければ、その子にとってはいい本とは言えないのです。「〇歳の子ですが、どんな絵本を選んだらいいのでしょうか」というような質問をよく受けますが、私はこのように答えます。「私はあなたのお子さんをよく存じあげていません。今どんなことに興味があるか、今どういうことをして毎日遊んでいるかなどよく存じあげませんので、一般的に、何歳

ぐらいであればこのような本がいいですよというところまでしか申し上げられません。お母さんは自分の子どもをよくわかっているでしょう。先生の方がよくわかっているでしょう。ですから、目の前の子どもを見てこういう本を読んであげたいなというご自分の気持ちを優先すればいいのではないですか」と。絵本に関して言えば、ご自分の好きな絵本、また、目の前の子どもの興味がありそうな絵本を選んであげて読んであげるのがいいと思います。

一色：例えば、良い本、悪い本、目利きする。それとともに、親御さんにとっても、自分が小さい時に絵本を読んでもらった人は、それなりに思いがあると思いますが、不幸にしてそういう経験がない親もいるわけです。そういう場合は、自分の子どもにどういう本をということ、それから保育所、幼稚園教員になった人も自分の子どもを育てた経験がなくて、よくわからないこともあると思います。そういう時によい絵本、今日紹介していただいた絵本は、心に染み入る本でしたが、やはりその時の参考になる、基準になるものがありましたら、お話していただけますでしょうか。

森：先ほど、大雑把な選び方については、お話しました。それでもなかなかわからないと思うのですが、図書館とか書店に行くと、書評のようなものが出ていますので、そこからいい絵本だと言われているものをどんどん読んでみられるのがいいと思います。一般的にいい絵本だと言われている本を選んで、読んでも、自分にはぴったり合わない、ピンとこないという絵本もあると思います。やはり、自分がいいと感動した本を選んだらいいかと思います。いろいろところで、何歳から何歳まではこういう本がいいですよというリストが出ていますと思いますので、いい本と言われているものをどんどん読まれたらいいと思います。いい絵本と言われている絵本を 200、300 冊と読んでいくと大体わかってきます。たくさん絵本を読んでいくと、これはどうかなというのは、言葉でこうですとはなかなか言えませんが、わかってくると思います。例えば、『ちびゴリラのちびちび』は大好きで、いつも紹介しているのですが、こんな絵本はいい絵本だと思えないと言う人もいます。それは、その人その人の感性なので、どうしようありません。結局、文学にしても、芸術にしても、最終的には、そういうところで落ち着いていくものなので、とにかく、いろいろな本を読んで当たってみることです。こうですよということは、なかなか言えません。ただ、一番最初に、良質の絵本の見分け方という大まかな目安をお話しましたので、それを目安にいただければと思います。

稲垣：森先生が良質の絵本のお話で、絵だけでストーリーがわかる本とおっしゃったのですが、テレビのアニメと絵本の違いは、読んでいたら、絵本は、読んでいる時に子どもがストップできるのです。自分で元に戻して、また、ここからと読むなど、子どもの主体性がそこで表現できます。そこがアニメーションのように一方的なものとの違いで、戻しながら、ストーリーのスピードも子どもたちの主体性が表現できるようなものになっています。先ほど、絵でストーリーがわかる本のお話で『桃太郎』のお話を伺って関心しました。それから、とてもきれいな正しい日本語、これは、最近、柳田邦男という評論家が絵本の紹介をずいぶんされていますが、あるところで、海外に行く親戚に、絵本をたくさん送った。子育

てを海外でしなければならない時に、お母さんはとても不安だったけれども、子どもにその絵本を一生懸命読み聞かせしていると、その子どもが小学校に入った時でも、現地の第二言語を獲得するのが早くて馴染むことができたというお話を聞いたことがあります。やはり、きれいな正しい日本語を絵本から子どもたちが学んでいったということでした。

一色：森先生のお話の中に、今子どもたちがどういう状況に置かれているかというお話もありまして、物質的な豊かさや便利さによって、逆に失われるものがあるということで、昔当たり前のように行われていた親子の心の交流が無くなってきているということでしたが、その辺りは、どうして豊かになったのに、なくなってしまったのでしょうか。

森：本当に、親も子どもも忙しくなってきました。そして、高度経済成長期の頃から、物さえ与えればという、本当に子どもが求めている、ゆったりとした子どもの時間とか、先ほど遊びの3つの間（時間、空間、仲間）が無くなったお話をしましたが、もう一つ手間、親が手間暇の手間をかけていないと言われていきます。働いて、給料が上がって、そのお金でいろいろなものを買って、いろいろな物を子どもに与え、確かに物質的には豊かになりました。物質的なものが増えてくれば幸せになれると信じてずっと来たわけです。私たちがその年代なのかもしれませんが、その中で子どもたちは、取り残されていって、成績最優先で評価されるようになりました。日本は極度に競争的な教育制度のなかで、子どもたちが発達上の障害を起こす可能性があると言われていました。とにかくいい成績を取って欲しい、成績さえ良ければ、他は何をしてもいいというような社会になってきました。その無くした物のたいせつさというのを、私たち大人が見失ってしまってきたのです。もっとゆとりをもっていろいろなことを考える時間を持たないといけないと思っています。

一色：稲垣先生、ブックスタートは一番最初、イギリスで始まったということでしたが、イギリスも当然、豊かな時代に入って、そういう政策が生まれたきっかけは、その中で親子の心とか、そのようなところも背景にあったのでしょうか。

稲垣：ブックスタートの始まりは、論文しか読んでいませんが、なぜイギリスで始まったのかということは論じられていません。ただ、桜井さんが論文を書いた頃は、イギリスは9割以上で実施されていると書いてあります。昔、日本は、本が無い時でも、昔話といって親が子どもに伝えていました。本がなくても話されていた。ところがそれが本という形に出来上がって、今や、年に2000冊の児童書が出版されているということに驚かされるのですが、今4年生で、長く続く絵本とすたれていく絵本とはどこが違うのかということを研究したいという学生がいます。森先生が、初版がいつで、長く出版されている本がたいせつな本で、それが、良質の絵本の指標だというお話をされていましたが、正に何年経っても、同じものが作られて、すたれていかない。ただし、すたれていってしまっ、絶版になってしまった本もたくさんあるということで、絵本の流れも時代の流れとともにあるのではないかという気はします。ただ、

ブックスタートでどういう本を親御さんに提供しているかというリサーチも知りませんので、どういうものを全国的に配布しているのかということも、調べたら面白いと思います。

森：『いない いない ばあ』は必ず入っていると思います。

稲垣：『いない いない ばあ』は、この子ども学講演会でも講演していただいた松谷みよ子先生が書かれています。ですから、図書館で『子ども学』の過去の研究誌を読まれると『いない いない ばあ』についての話も出ていると思いますので、お読みください。

一色：稲垣先生の子どもさんのお話も、興味深く聞かせていただいたのですが、読み聞かせというか、帰ってくると、自分で絵本を読んでいたということでしたが、子どもの成長発達にとって、初めは親と一緒にあって、楽しく絵本を親から読んでもらって、一緒に共有していく。それが段々と、自分で読んでいくように変わっていくその辺りの変わり目は、いつ頃、どのような形で起こってくるのでしょうか。

森：大体、読めるようになったら、自分で読みなさいとか、小学生になったから、自分で読めるでしょとなっていきます。文字が早く読める子も、遅い子もいます。読めるようになったら、自分で読みたい欲求が出てきます。自分で読めるから、読んでくれなくてもいいという時期が来ます。実際に、読み聞かせを、そこでストップしてしまう家庭もあります。时期的には、大体、小学校に入ったぐらいの時期が一般的ですが、私は、ずっと読んであげて欲しいと思います。自分で読めるようになって、小学校1、2年生でしたら、文字を追うだけで精一杯です。読むだけで、お話の中に入り込んで絵本体験をするのは、まだ1、2年生では、ちょっと難しいのです。ですから、読めるというのは、素敵なことですが、平行して、読み聞かせは続けていつてあげて欲しいと思います。読み聞かせは、勉強のためではないのです。親子で、楽しい時間を過ごす、同じ感情体験をする、一冊の絵本を読んでもらって、共有体験、共通体験を重ねていくというのが、それからの生きていく大きな力になっていくと思っていますので、読めるようになって、読んであげて欲しいと思います。小学校の間は、是非続けてあげて欲しいと思います。自分で読みたい本と読んで欲しい本があるのです。それも、お父さんにはこの本を読んで欲しいというような、子ども側からすると、そのような使い分けもあるようです。中学生になっても読み聞かせをしているという家庭もたくさんあります。大きくなってもまだ続けているという話をしていたら、そんなに大きくなっても読み聞かせをしないと眠れないのかと笑われる人もいます。その方は、絵本の読み聞かせをしないで、どうやって人としてたいせつないろいろなことを伝えているかとても不思議だと思ったとおっしゃっています。大体の目安はそんな感じですよ。

一色：森先生にまとめとして、もう一度、今日のお話の中からメッセージとして絵本の効用についてお話ししていただいて、その上で、学生から質問を受けたいと思います。

森：絵本は、アルバムと同じようなものだと思います。先ほどの松居直さんの息子さんのお話ですが、幼いころに心を込めて語ってもらったお話は、その後も心から消え去ることはない。人生の最も重要な時に心の底でよみがえり、さまざまな考え方を指し示してくれるのです。そればかりか、語ってくれた人の温かい心が思い出され、僕の心を勇気づけたりもしたのです。自殺しようとした子どもが、その本を読むことで、自殺を思い止まったとか、何かあった時に、読んでくれた人のことが思い出され、心の歯止めになってくれたなどたくさんの実例があります。絵本を開いて、読み返すことで、あの時、あの頃読んでもらったなあとか、あの部屋で読んでもらったとか、いろいろなことが本を読み返すことで、よみがえってくるわけです。そして、何かあった時に大きな力になってくれるものだと信じています。皆さんもあまり絵本を読んでこなかったという方がいらっしゃったら、今からでもいろいろな絵本を読んで、そして、自分の心の支えになるような絵本に出会っていただきたいと思います。

一色：では、学生の皆さんで質問、コメントなどありませんか。

学生 A：私は、保育士の資格を取っていないので、絵本についてのお話を伺うのは今回が初めてだったのですが、とても興味深いお話を聞かせていただきありがとうございました。身体の基本体力があるように、心の基本体力があるということで、知らなかったことがたくさんあって、それを鍛えるために、心を揺さぶるということをよく理解することができました。

学生 B：普通に絵本を読むだけではなくて、子どもにちゃんと伝わるように絵本を読むことが一番大事なことであると思いました。

森：伝わるようにというか、普通に読んであげればいいと思います。構えずに読んであげたいと思う本を普通に自分の自然な読み方で読んであげればいいのです。伝えるようにとあまり意識しなくて大丈夫です。

学生 C：虐待で絵本の経験が少ない子どもには、後から読んであげるというのは、意味がありますか。

稲垣：いつまで経っても意味があります。私たちも、こうやって、森先生に絵本を読んでもらったこととても意味があると思います。皆さん方も意味があったと思います。

一色：生きている限り、絵本を読むことは、一つの発見だし、人と人が共有できる場であると思います。大人になっても絵本を読むことによって、子ども時代のことなど、いろいろなことが蘇ってくることがあるということです。

学生 D：以前、絵本がたくさん置いてあるカフェに行って、一冊の本を見つけたのですが、あるページ

までは同じなのですが、そこからふたつのストーリーに分かれていて、いい終わり方、悲しい終わり方に分かれているのですが、悲しい結末の方はどういう時に読むのかと思ったのですが、どのようにお考えですか。

森：私はそういう本を見たことがありません。テレビで、分岐点があってふたつのストーリーに分かれていくという番組を見たことはありますが、絵本では読んだことがありません。今の質問が、悲しい絵本は読んであげてもいいのですかということでしたら、悲しい絵本でも読んであげればいいと思います。子どもは子どもなりに、その子どもなりの悲しみとかつらさを皆持っていると思います。ですから、自分だけではないのだと、その子なりの理解の深さでいろいろなことを感じると思います。楽しいお話ばかりではなくて、例えば、戦争の話とか、悲しい話と一緒に織り交ぜて読んであげればいいと思います。どんな時という状況も問わないです。でも、悲しい話ばかりというのではなくて、嬉しい、楽しい話の中にそのような悲しいお話も読んであげたらいいと思います。

一色：それでは、ここで休憩とし、第一部を終了いたします。

【休憩】

一色：では、第二部を開催いたします。本日のタイトルは「絵本で築く親子の絆」ということで、語呂がいいと思い、森先生と相談して決めました。今日の森先生のお話、稲垣先生のお話、また今日のテーマについてご質問、コメントなどがあれば、挙手ください。

一般 A：6カ月の娘がおります。ブックスタートのお話で、0歳からということで、実際0歳と言っても生まれてから12カ月までありますが、どれぐらいの時期をおっしゃっていますか。今実際に6カ月の娘に松谷みよ子先生の作品の絵本を見せているのですが、自分でページをめくろうとしたりしているので、意味があるのかと思いながら、どこまで伝わっているのかというのが、自分の中でわからなくて、その辺りを教えていただきたいのです。6カ月というのが、始めてもいい時期なのか、早すぎるのか教えてください。他、今日読んでいただいた『さっちゃんのまほうのて』というのを、実際に目を閉じて聞いていましたが、情景が浮かんできて涙が止まりませんでした。小学校低学年向けの本でも、この歳になってこんなに感動する本があるということが自分の中でも意外で、絵本というのは、子どもだけに一方的に与えるものというイメージがありましたが、私自身このような時間を持てて、とても気持ちが安らいだ気がします。

森：妊娠したら本を読もうと提唱されている方もいます。それは、大阪国際児童文学館の名誉館長の中川正文先生です。妊娠して、お腹の赤ちゃんに絵本を読んであげれば、お母さんの声と他の人の声を区別するそうです。それで、どこまでわかるかというのは、何かわからせようとか理解させようとして絵

本を読むものではありません。お母さんの温かい声を伝えてあげてください。だれか読んでくれる人がいる、自分に関わってくれる人がいる、それを感じる事がアタッチメントの始まりなのです。自分だけに読んでくれる人がいる、語ってくれる人がいる、それが一番大事な事だと思っていますので、早すぎるということは全くありません。理解できなくても、読んでくれるお母さんの声を聞く心地よさというのは、何物にも変えがたいものだと思います。子どもにとってはそういうものなので、お母さんが読んであげたいと思う絵本を読んであげてください。

一色：他にどなたかいらっしゃいますでしょうか。

一般B：大阪に住んでおりまして、地域の図書館へ時々行きます。地域の図書館は、午後から行くと絵本の読み聞かせをしているところがあります。それを聞いていると、非常に、声色を使ったり、かなりドラマティックにお話をされています。今日の森先生のお話は、静かな調子で淡々とお読みになっていた。これは、相手が大人だからこのようなお話のされ方をしたのか、それとも、相手によって変えておられるのですか。

森：大人でも子どもでも、同じような読み方をしています。いろいろな本に、感情たっぷりに読むように、女優さんになった気持ちで読むようになど、演出をしながら読んだ方がいいと書かれていますが、私たちはそうではないと思っています。演出するということは、読み手の解釈ですから、それを聞き手に押しつけることにもなると思います。その聞き手とは、その人の今まで生きてきた経験とか年齢により、読み取り方、聴き方、理解の深さに当然違いがあると思います。それを演出することで台無しにしてしまう可能性があるのではないかと思います。いい絵本は、普通に読むことで、訴える力を本が持っていると思っています。皆さん、上手に読みたいとか、受けてもらいたいという気持ちがおありだと思っています。このように読んだら子どもが喜んでくれるのではないのかと頑張っておられると思いますが、それは逆効果ではないかと私たちは思っています。普通に読むだけで十分ですし、ボランティアで読み聞かせをしている方たちにとっては、読み聞かせをする場所に来られる人は、限られていると思います。ですから、ある程度コミュニケーションがとれた同士が聞き手、読み手になっているわけです。そのような間柄でしたら、尚更、そういうことは必要ないと思います。そこへ行ったら、いつも読んでくれるおばさんが、いつものようにお話してくれる。そういう安心感があり、心の交流が自然にできていくので、オーバーな演出は必要ないと思います。

一般B：ありがとうございます。もう一つ、少し深刻な問題ですが、『さっちゃんのまほうのて』というのは、とてもいい本だと思います。私もずっと障害児教育に携わってきましたので、障害を持つ子の親の気持ちを察すると、『さっちゃんのまほうのて』の親はちょっと泣き虫だと感じました。いろいろな障害を持っている子どもを育てるためには、何かを言われると涙を流すような親では子どもは育たないのではないのかと感じました。これはずいぶん前に出版された本ですから、私が現職にいた頃もこのよう

な本を親に読んでもらったりして感想を聞いたことがあります、やはり、これは健常児を持っている親の気持ちで、障害を持っている子どもの親の気持ちはこんなものではないという声を非常によく聞かれました。例えば、聲の子どもがいつになったら自分で自覚して自分が聞こえないということを言い出すか、その時の親の気持ちはどうなのかということを親から直接聞かされたり、その時、非常に悩んだと聞きました。『さっちゃんのまほうのて』はいい本だけれども、どうもきれい過ぎるという感じを受けました。障害児の子どもを持つ親はいろいろな経験をしています。『さっちゃんのまほうのて』の親は、やはり健常な子どもを持つ親が、障害を持つ子どもを考えて作った本ではないかと感じました。その辺り、どうお考えですか。

森：でも、この本は、先天性四肢障害児父母の会、のべあきこさん、しぎわさよさんの共同制作です。だから、さっちゃんには、モデルになった子どもがいて、健常のお子さんを持っている親が書いたものではないのです。私たちも、障害を持った人がいらっしやるところで読んでいいものかどうかというのは、悩んだりします。でも、読みます。やはり生きていかなければいけませんし、そこをお互いに避けて生きていくことができません。ですから、今日はあの人がいるからこの本を読むのを止めようということとはしません。用意してきた本を読みます。

私はこの本がちょっときれいごと過ぎるとはあまり思わないです。この本ができる前に、保育所の先生をなさっていた方がいます。同じような障害を持った子どもさんがいたそうです。その子はいへんな努力をして、普通の子ができるようなことも全部できるようになったそうです。今までは同じように遊んでいたのに、ある時、自分の障害に気がついて、同時に他の子もそのことに気がつきました。この子が、どうしてこういう事故にあったのか、どうして皆と同じようにできるようになったのか、どんな努力をしたのか、ということを他の子に、どういうふうに説明したらいいのかとずっと悩んでいたそうです。その先生なりにいろいろなことを伝えようとしたそうです。何年かして、この『さっちゃんのまほうのて』が出版された時に、自分はいろいろと悩んできたが、この本がすべて伝えてくれている、絵本の力はすごい、この本があれば、そんなに悩まずに読んであげるだけで子どもたちは理解したと思うとおっしゃっていました。ですから、どうかなという気持ちは大事であると思いますが、私は講座のなかでこの本を読ませていただいています。

稲垣：長年障害児と関わっておられるので良くわかってられると思いますが、発達障害に関しては、非常に軽度から重度まであります。最近、専門家たちは子どもたちの発達が少し歪んでいる、或いは、発達が健常でない、定型発達、非定型発達と最近では言っていますが、非定型発達の場合は、その子ども自身の特性であると理解しています。この特性を親がどのように理解して、その子どもの特性によって社会的に不適用を起こした場合を、障害と呼ぼうと理解しています。ですから、発達障害という言葉を使うよりは、その子どもの発達の特性と見ていただきたい。それによって、二次的に何らかの社会不適応が起きた場合に、発達障害と診断名としてつける。社会的不適応が起こった障害に関してどうするかを一緒に考えていきましょうというのが、今の非常に理解しやすい文言的な説明の仕方です。

それから森先生がおっしゃった、親が悲しみを感じるというのは、子どもの特性受容のプロセスがあります。告知された時にショックがあつて、それから悲しみがあつて、怒りと悲哀があつて、そして何をしてもこの子どもの特性はうまくいかない。けれども、この子の特性を認めて一緒に生きていこうという、これは統合ですが、そこまで子どもの特性を受容すれば生きていけるようになりますので、親の子ども
の特性受容のプロセスを知っていてそのような過程で特性の受容がなされるということを知っておくと、この親御さんは今どの段階まで特性受容が進んでいるのかがわかりますので、それを進ませるような寄り添いをする、親御さんは、子どもさんの特性受容がなされるようになります。そうすると、非常に親子が共に生きていくという流れになりますので、そこを私たちはちょっと支えながらやっていきたいのです。今、私の立場でお伝えするのは、特性と障害の違い、それから医療的には、定型発達、非定型発達という言われ方をしているのが、その子の特性であると理解していただき、それからちょっと歪んでいる子どもとても重度の特性を持った子どもも、発達のスペクトラム上にあるということです。そして、その子どもさんが持っている特性を持ちながらも、生き生きとその子が人生を過ごしていれば、それはとても健康だということです。健康概念が WHO で出ていますが、自分の持っている特性を生かしながらも社会に自分らしく生き生きと参画できていけば健康であるという概念がありますので、その部分をご理解いただいて、サポートしていければいいのではないかと思います。

一色：では、他にご質問などございますか。

一般C：本日はどうもありがとうございました。絵本というのは、電波で送られるテレビと同じメディアだと思います。だからテレビを見始めると絵本などは読まないでという形になってしまうと思います。これは、問題があると思います。絵本で教育、育てようと思えば、テレビを見るのを止めるべきだと思います。幼児期は、そのように絵本でコミュニケーションを取りながら育てていくのが本当にいい教育ではないかと思っています。それと同時に、人間は自分が一番かわいいと思う、それが、やはり虐待になっていくと思います。ということは、自分の方が子どもよりかわいい。そういうのが虐待になる一つの要因であると私は考えています。ですから、それには、自分というものをもっと抑えていかないとけないのではないかと思います。

一色：コメントをいただきました。自分が一番かわいいのが人間ではないか、そういう意味でいうと、虐待が起こるのも親は自分がかわいいから起こるのではないかというお話でしたが、稲垣先生、いかがでしょうか。

稲垣：自分がかわいいのは当然です。最近、虐待する親と虐待されている子どもに自分の心と身体を大事にしてください。自分の心と身体を大事にすることは一体どういうことなのかは、考えてください。自分の心と身体を大事にして、自分を大事にしたら、他人も大事にできるはずだからという話をしています。ですから、親は親の生活と親の時間と自分自身を大事にすることが、子どもを大事にする

ことに響き合うはずだということです。人間は、一人では生きていけません、お互いに支え合って生きていきますので、家族機能というのは、お互いに支えあった相補作用といいます。その相補作用で家庭、家族をクリエイトしています。人間は、クリエイトするものです。クリエイトしていく、だからこそ、この人とクリエイトしなかったらこの人と離婚した方がいいとか、この人と一緒にクリエイトするのはつらいと思って結婚しない。だから最近の若い人は結婚しないのではないかと思います。家庭というものをクリエイトしていくという決意みたいなものの理解ができていないという気がしてなりません。だからこそちょっと付き合っ嫌なところが見えると、この人と一緒に自分のクリエイトファミリーを形成していけない。子どもにとっては生まれてきた家族・家庭は固定家族（子どもが選べない家庭）で生まれてきますが、結婚によって今度は自分たちが作る、クリエイトする家庭があります。生物学的には、一緒になって、子どもができて、子どもができたなら結婚するわけですが、家庭をクリエイトするのは、なかなか大変です。ところが、虐待している親子は、そんなに虐待されている、虐待するのが嫌なはずなのに、なぜそこに縛られるか。そこに縛られるというところになぜ縛られるかということを理解しておかないといけないと思います。だからこそ、親子でクリエイトする、親子で家庭を作り上げる、どんな家庭を作るか、今よりは楽になる。今よりは、自分が楽でいい時間といい環境を過ごせるような家庭をどうすれば作っていいのかということを一緒に考えていくスタンスが必要です。当然自分がかわいい。だから自分の心と身体を大事にしてもらわないといけないと思います。大事にするというのは、その人によって違うと思いますが、それが表現形として子どもを虐待することになった。これは、表現形がだめであって、その人がだめであるということではない。表現形を変えていくということをしていかなければいけないし、人間の根源的なクリエイトするというのが、今、何を私はクリエイトしているということを常に考えながら生きていかなければいけないのかもしれない。

一色：今、コメントいただきました最初のところでは、絵本で育てようとすればテレビを止めるべきだというお話もありましたが、今、実際、子どもが目を丸くして一体何に知的好奇心を向けているか。その辺りが子どもの原点だと思います。そういう面からすると、テレビで送られるコンテンツに対しても、非常に知的好奇心とか好奇心を持って接するケースもあると思います。絵本の良さというのは当然あるのですが、そういったテレビの良さというのもまたあると私自身は思います。ですから二律背反ということではなくて、絵本の良さ、テレビの良さ、それぞれあると思います。もちろん、テレビの弊害もあると思いますが、実際、科学的にフォローアップ調査をNHKの放送文化研究所で実施していますが、その中で出てきた部分でいうと、世間的には、テレビが悪いから成長発達に遅れが出ると言われたりするのですが、逆に、テレビによって、成長が遅れるようなことは今のところ出ておりません。絵本の読み聞かせとか、外遊びなどによって子どものより良い成長が起こっているというデータが少し出ています。メディアの中にもいろいろなメディアがありますので、そういった辺りの内容についても、いろいろお考えいただければと思います。他にご質問などございますでしょうか。

一般D：孫娘のことですが、両親は、学校の教師をしております。この二人がなかなかうまくいかない

ので、孫に大きな影響が出ています。複雑な話なので、説明しづらいのですが、そうした中で、どのように私たちがカバーしてあげればいいのか、その方法がわからなくて、私自身が非常に悩んでいます。何をどう説明して、どう伺えばいいのかもわからない状態です。私は、民生員とか児童員をしていますので、本当は面倒を見る側の一員でもあるのですが、実際に我が家に起こったことについては、お手上げ状態です。どう考えていけばいいのかご指導ください。

森：問題提起ではありませんが、皆さんにいつもお話していることがあります。自分が、心から満たされている、安心できる場所がある、お父さんでもお母さんでも親類のおばさんでも誰でもいいのですが、何かあった時に何でも話せる人がいる、安心できる場所がある、自分の居場所があるという子どもが、誰かをいじめてやろうという気持ちになるかなあといつも考えてしまいます。絶対にならないと思います。ですから、いじめている子どもも、何かにどうしてこういう事故にあったのか、どこかでいろいろな形でいじめられている子どもではないかとも思っています。少年事件を多く扱われた弁護士の方がいるのですが、その事件を起こしている原因を突き詰めていくと、大きな原因の一つに、親子関係が必ずあると言われています。親子関係が良好であったら、どこかで歯止めになってくれるはずだとその方は言っています。そして、事件を起こした子どもたちに共通することは、大事に扱われたことがない、自分はたいせつに育てられたという感覚を持っていないという子どもが多いのです。自分のことを心配してくれる人はいない、自分なんかどうなってもいいんだと考える子は、他の子も自分と同様にどうでもいい存在だと考えてしまいます。自分が大事に育てられたという思いがあれば、他の子も、自分と同じように大事な存在なのだと思うわけです。自分なんか誰も心配してくれる人はいないと思っている子に対して、どのように誰が支えてあげるか、理解してあげるかということになるかと思いますが、両親でなくてもいいわけです。いつも近所を歩いている時に声をかけてくれるおじさん、おばさんがいる、たったそれだけで、見守られていると思うのです。ましてや、名前を呼んでくれるということで、私はあの人に好かれているのだと小さい子どもは感じるわけです。それは、小さい子どもでなくても、求めても答えてもらえなかったと、中学生、高校生になってもそういう思いを引きずっていくわけです。だから、私たちがすぐにできることは、誰かに会った時に、「おはよう」「こんにちは。元気?」と、そういう挨拶、声かけ、そこから始まるのではないかと思います。

絵本から外れますが、人を殺して何が悪いと聞かれた時にどのように答えますか。悪いことは悪いでは、通じません。まず、自分が生きていてもいいのだ、自分は生まれてきてよかったのだと思える子どもでないと倫理は入っていかないとされています。こんなことはしてはいけない、道徳でこうだと言っても、自分がたいせつに思えない、自分が生まれてこなければよかったという子どもには、そういう倫理が入っていきません。まず、生まれてきてくれてよかった、私はあなたがここにいてくれるだけで幸せなんだと、誰か一人だけでいいのです。そう思ってくれる人がいることで、自分のことをわかってくれる人が一人だけでもいることで、救われる子どもはたくさんいると思います。

まず、そこからだと思います。そして、私たちは、家で絵本を読んでももらえない子どもに、支援センターに来る子どもたちに、図書館に来る子どもたちに、教室で先生の読み聞かせを待っている子どもたちに、

読んでもらう心地よさを味あわせてあげたいと思って活動しています。

一色：最後にどなたかいらっしゃいますか。

一般E：『いない いない ばあ』の本について質問なのですが、私も何度も読んでいた本なのですが、始めの頃は、「いない いない」と「ばあ」が隠れていて「ばあ」と出ます。最後に男の子がいるところは、同じページに「いない いない」「ばあ」で終わっています。ここだけなぜだろうと思っていたのですが、今日の先生のお話を聞いて、不安と安心が順番に流れているとおっしゃっていたので、もしかして、これは最後のページだから、いなくてもまた出てくるよという安心の場面で終わっているのかと理解したのですが、先生はどのようにお考えですか。

森：その通りだと思います。絵本というのは、そういうものです。こうじゃないかなと読み手が解釈したらそれでいいのです。他の人はそう思わない、こう思うと言ってもそれでいいのです。作家の手を離れて読み手の元へ行ったら、その読み手の解釈がその人にとってはそうだということでもいいのです。だから、あまりこの本はこうだと深読みしなくても自分が感じた通りのことを受け入れていけばいいと思います。

一色：今日は「絵本で築く親子の絆」ということでしたが、実は、森先生は、『絵本を読んであげましょ
う』という、絵本を読むということの素晴らしさを書いたご著書があります。その中で私自身も自分の子ども時代を思い出しました。その一節の文章がありますので、最後にご紹介します。「絵本は子どもだけのためにあるのではない、はるかな日に失った子どもの純粋な希望や失意、あるいは喜びや悲しみといったものが子どもの本のなかでよみがえり、再び、子どもの心を知ることになる。大人の今を見つめ直すのです」ということで、今日の講演会は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。